HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	帯広市泉町A遺跡の細石刃石器群
Author(s)	夏木, 大吾
Citation	北海道大学考古学研究室研究紀要, 5, 1-9
Issue Date	2026-01-08
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98741
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98741
Type	departmental bulletin paper
File Information	01 Natsuki.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

■論文

帯広市泉町A遺跡の細石刃石器群

夏木大吾[a]

a 北海道大学大学院文学研究院　dnatsuki@let.hokudai.ac.jp

要旨　北海道帯広市泉町A遺跡から出土した細石刃核は北海道における既知の細石刃核型式に当てはまらない技術的特徴を有しながらも，峠下型や広郷型の変異形態として捉える見方が提示されてきた。本稿では，泉町Aから出土した313点の石器を対象に，遺物組成と接合資料，細石刃核の技術形態的特徴を分析し，泉町A遺跡出土細石刃石器群の再評価を試みた。峠下型細石刃核，広郷型細石刃核との異同を整理し，先行研究において類似が指摘されてきた紅葉山型細石刃核や本州東北部の荒川台技法との関連性について考察した。泉町A遺跡の細石刃核素材（石刃・剥片），素材の用い方，母型整形，打面作出・調整，細石刃剥離作業面などのあり方から，本州東北部～北海道に分布する稜柱形細石刃核の技術的変異の一つとして捉えられる可能性を提示した。

キーワード：泉町A遺跡，峠下型細石刃核，広郷型細石刃核，紅葉山細石刃核，技術的変異

はじめに

北海道では，これまでに数多くの細石刃核型式が認識されてきた。細石刃核型式または細石刃技法の特徴を捉え，時空間的に限定された石器群様相もしくは分析の単位として区分することが，層位的事例や信頼性の高い年代的証拠に恵まれない北海道においては重要な意義をもってきた。吉崎（1961）による湧別技法の提唱に始まり，細石刃核の認定をめぐる検討（杉原 1965；加藤 1965；鶴丸 1985 など），細石刃剥離技術の包括的な分類と定義・体系化（上野・加藤 1973；鶴丸 1979），類型概念（筑波大学遠間資料研究グループ 1990）とテクノコンプレックス概念の提示（木村 1991）などを経て，1990 から 2000 年代において細石刃製作技術の多様性に関する共通理解が形成されてきた。個々の細石刃核型式を重要な構成要素とする石器群グループについても整理が進み，これを分析単位とした全体的編年案（寺崎 2006）や行動論的研究（山田 2006）が提示されてきた。

すでに北海道の細石刃製作技術のバリエーションは十分に把握されているかに思えるが，実際の型式認定においては従来の分類にはあてはまらない例も存在する。北海道帯広市泉町 A 遺跡から出土した細石刃核もその一つである。泉町 A の細石刃核は，既知の峠下型あるいは広郷型との関連性に言及される（北沢 1992；山原 1997；山田 2006）以外に，紅葉山型や荒川台型との類似性も指摘されている（阿部 1998，2013：直江 2007）。この細石刃核については，報告書刊行後，さらに接合分析が進められ，細石刃核素材，細石刃核母型の整形，細石刃の剥離技術に関する詳細な検討がなされた（山原 1997）。

本稿では，改めて遺物組成と接合資料，細石刃核の技術的特徴を分析し，泉町 A から出土した細石刃石器群の再評価を試みたい。

1．泉町 A 遺跡について

泉町 A 遺跡の発掘調査は 1990 年に行われた（北沢 1992）。泉町 A（図 1）は帯広市街地の南 20 数 km，帯広空港の東の畑作地帯に位置している。

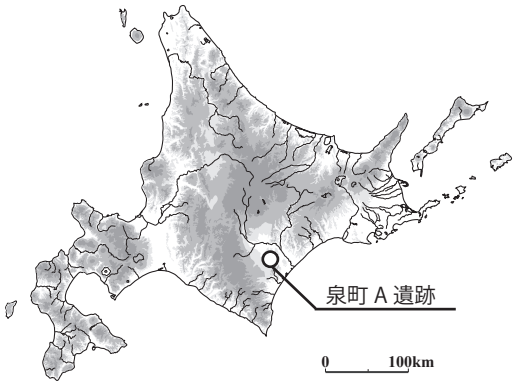


図 1　泉町A遺跡の位置

北海道大学考古学研究室研究紀要　第5号（2026）
Bulletin of the Laboratory of Archaeology, Hokkaido University 5（2026）

受付 Received 2025年 9月10日　10 September 2025
受理 Accepted 2025年12月20日　20 December 2025

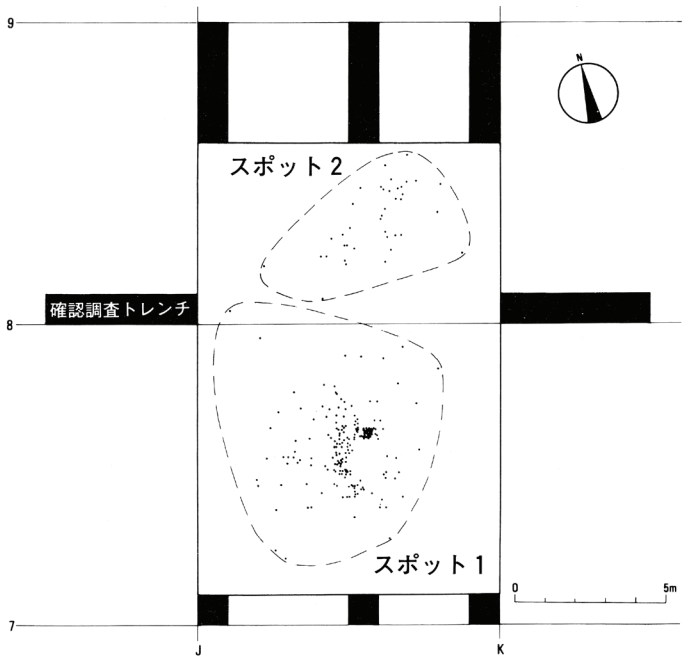


図２　泉町A遺跡における遺物分布

十勝川の支流である途別川に合流する小河川，アカンボ川の左岸の標高約 150m に位置する。遺跡周辺には Spfa-1 や En-a の二次堆積によって形成された古砂丘が広がり，古砂丘上には空港南 A 遺跡や上似平遺跡，勢雄遺跡など多くの旧石器時代遺跡が分布している。

遺跡の主な層位は下記のとおりである。

Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：ソフトローム層
Ⅲ層：ボール状ローム層
Ⅳ層：En-a の二次堆積層
Ⅴ層：未風化の En-a 層

遺物包含層はⅡ～Ⅳ層で，このうち主体となるのはⅡ層下部からⅢ層上部にかけてである。

表１　泉町A遺跡の石器組成

器種	スポット1	スポット2	計
削器	1	1	2
彫器		1	1
錐形石器	1	1	2
石器破片		2	2
石刃		1	1
細石刃	65(58)	2	67(60)
削片	1	1	2
細石刃核	5(4)		5(4)
剥片	21	6	27
細片	175(174)	27	202(201)
礫	1	1	2
計	270(261)	43	313(304)

※カッコ内は折れ接合資料を1点とした場合の点数

南北 15m 東西 10m の発掘区の中から石器集中部が検出されている。石器集中部はスポット 1 とスポット 2 の 2 か所に区分され，スポット 1 は主に J7 区，スポット 2 は J8 区に分布する（図 2）。報告者の北沢は二つの石器集中部が同時性をもって形成されたと推測したが，当時，これらの石器集中部間での接合は確認されていなかった。後に，山原（1997）が追加で接合作業を行い，二つの石器集中部間での接合関係を明らかにした。

遺物は 316 点出土したと報告されている。遺物の主体は細石刃関連資料であり，少ないながら彫器，削器，石刃等を含む（図 3・5）。

２．資料の分析

(1) 石器組成

本研究では，新たに未掲載資料も含めた器種分類と遺物の集計，接合作業を行った。ほとんどの石器については，報告時の器種分類を採用したが，一部は変更している。船底形石器もしくは幌加型細石刃核とされていたもの（図 3：29）は，端部に縞状剥離もなく，形態的にも船底と判断できないため，弧状刃部をもつ削器と分類した。また，作業面再生剥片（図 3：41）が掻器に転用されたと指摘されたが（山原 1997），剥離痕が微小で積極的に掻器とは分類できないため，報告時と同様に剥片として分類した。それ以外には，径 2cm 未満の剥片を細片，2cm 以上を剥片として分類した。

実見できた資料を集計した結果，遺物総数は

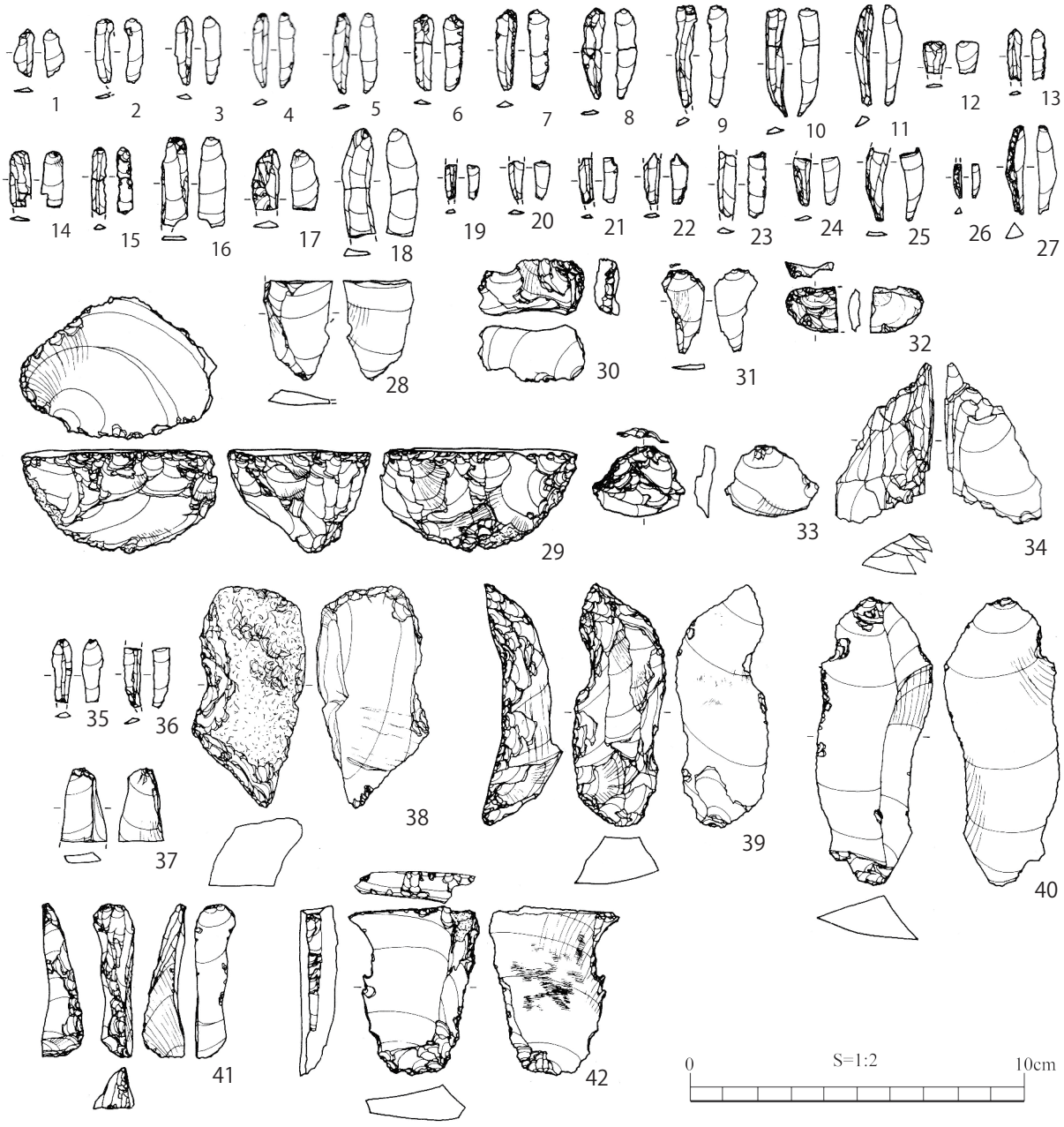


図３　泉町A遺跡における主な出土石器（北沢1992より転載）

313 点となった（表 1）。報告書の記載より 3 点少ないが，主要な遺物は含まれており，石器群の内容を把握するうえで支障はないと考えた。

スポット 1 は 270 点，スポット 2 は 43 点の石器類から構成される。石器石材のほとんどは黒曜石（308 点）であり，頁岩は 3 点と少ない。その他 2 点はチャート等である。頁岩はスポット 2 で出土した剥片 1 点と細片 1 点のみである。

スポット 1 の主な出土遺物は図 3 の 1 ～ 34 および図 5 の B01・C01・D01・F，スポット 2 は 35 ～ 42 である。細石刃関連資料はスポット 1 で多く，スポット 2 では極めて少ない。それとは反対にトゥール類はスポット 2 で多い。主な石器には削器（図 3:29, 39），彫器（42），錐形石器（28, 38），細石刃（1 ～ 27, 35, 36），石刃（40）がある。削器には，上述した剥片製の 29 以外に，石刃の左側縁に抉入加工があり，素材打面側に収斂する刃部をもつ例（39）がある。彫器（42）は石刃もしくは縦長剥片の折面を打面として，左側縁に彫刀面を作出する側刃形である。錐形石器は，石刃・縦長剥片の末端左側縁に微細加工を施したもの（28），折れた剥片の端部に微細な錯交剥離を施したもの（38）がある。

遺物のおよそ 65％を細片，9％を剥片が占める。

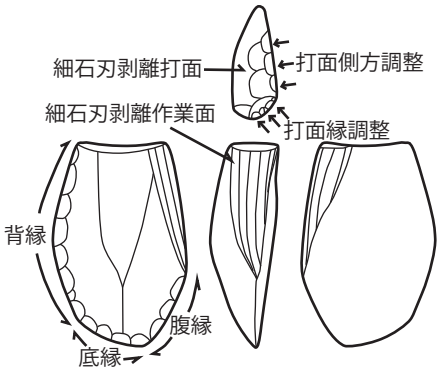


図４　細石刃核の部位・調整加工の名称

細片の多くは石核の調整かトゥールの二次加工で生じたとみられる。剥片のサイズも概して小さい。剥片・細片には背面に階段状剥離を伴う例が多い（30・32・33 など）。階段状剥離は細石刃核の打面調整によく認められる。細石刃関連資料が顕著なスポット 1 において剥片・細片が多いことから，これらの多くが細石刃核の調整剥離で生じた可能性を指摘できる。剥片で 3cm を超える例は 4 点のみであり，石器の素材生産がなされた明確な証拠は認められない。

(2) 細石刃関連資料

折れ面接合資料を 1 点として数えると，4 点の細石刃核（図 5）が出土している。筆者が石器の接合を試みた結果，2 組の資料において新たな接合を確認した。一組は図 5：B であり，報告書の接合図で示されていた細石刃 1 点（北沢 1992：図 10 － 48 － c）が実際には接合しないことからこれを外し，細石刃 1 点（B02）を新たに接合した。もう一組は，細石刃核 1 点（D01）と細石刃 1 点（D02）が接合した D である。

個々の接合資料および細石刃核の説明については，山原（1997）によって詳述されているため，ここでは細石刃製作技術や細石刃の特徴のみ整理しておく。ここで用いる細石刃核の部位名称等については図 4 に示す。

①細石刃核素材：　石刃素材（B と C）と剥片素材（D と F）の両方がある。

②素材の用い方：　素材の剥離方向と同軸（長軸方向）に沿って細石刃剥離作業面が設定される。打面は素材の打点側にある例（B・C・F）と末端側（D）にある例があり，素材の厚みの大きくなる部分に打面が設けられる。細石刃核の左側面に素材腹面，右側面に素材背面が置かれる。

③器体調整：　主に背縁や腹縁に連続的な剥離が施される例があるが，素材形状を大きく変更するような調整は施されない。腹縁の剥離は細石刃剥離に先立つ稜調整と考えられる。F などは，石核調整としては調整剥離が粗く，石核の前にトゥールとして利用された可能性が指摘されており（山原 1997），器体の周縁加工が石核調整のためのみに施されたとは言い切れない。

④打面作出・調整：　左側面からの側方調整によって作出される。打面長軸方向の縦長剥離は，作業面からの打面再生に関連する剥離のみが観察されるが，その後に側方調整が施される。側方調整によって，打面は右側面に傾くが，右側面からの階段状の剥離を繰り返すことで傾きが減じられている。細石刃剥離に先立ち，細かい剥離による打面縁調整が施される。この打面縁調整は細石刃剥離を行う部分に集中し，その部分では細石刃剥離作業面と打面の成す角度が 80 ～ 90° となる。また，打面縁調整によっても右側面への打面の傾きが修正される。

⑤作業面：　作業面上部が左側面側に傾く傾向にあり，左側面寄りの細石刃剥離面はねじれた剥離痕が生じている。

⑥細石刃：　上記したような作業面の制限によって，左側縁が外湾，右側縁が内湾する形状の細石刃が多く生じ，両側縁が平行する細石刃の生産性は高くない。完形細石刃の長さは約 1.5 ～ 3.5cm（図 6）である。細石刃の幅は 0.3 ～ 1.1cm まであるが，主に 0.4 ～ 0.6cm に集中する（図 7）。基部・末端部片を除く細石刃の幅と厚さを図 7 に示した。幅が 1cm を超えるような例は，側面に傾いた細石刃剥離（例えば図 3：34）によって生じている。細石刃の厚さは 0.1 ～ 0.18cm のものが多い（図 8）。これら細石刃の形態的特徴は遺跡に残された細石刃核の作業面の大きさや形状とも整合的である。

3．細石刃核型式の問題

泉町 A から出土した細石刃核について，山田（2006）は，素材端部付近に形成された打面および器体長軸に平行～斜行する細石刃剥離作業面の設定位置を重視し，広郷型細石刃核に強く関連するものと考えた。一方で山原（1997）は，細石刃核母型の製作技術においては広郷型の特徴（鶴丸 1985）に該当するとしながらも，細石刃核素材（石刃と剥片の両方），作業面の形状（素材腹面側への偏り，細石刃剥離面のねじれ）等がみられることから峠下型細石刃核との関連性を重視し，広郷型細石刃核から剥離された細石刃は側縁が平行しねじれや湾曲がほとんどみられない点を考慮する。細石刃核の素材および素材長軸と細石刃剥離作業面との位置関係については北沢（1992）も触れているが，

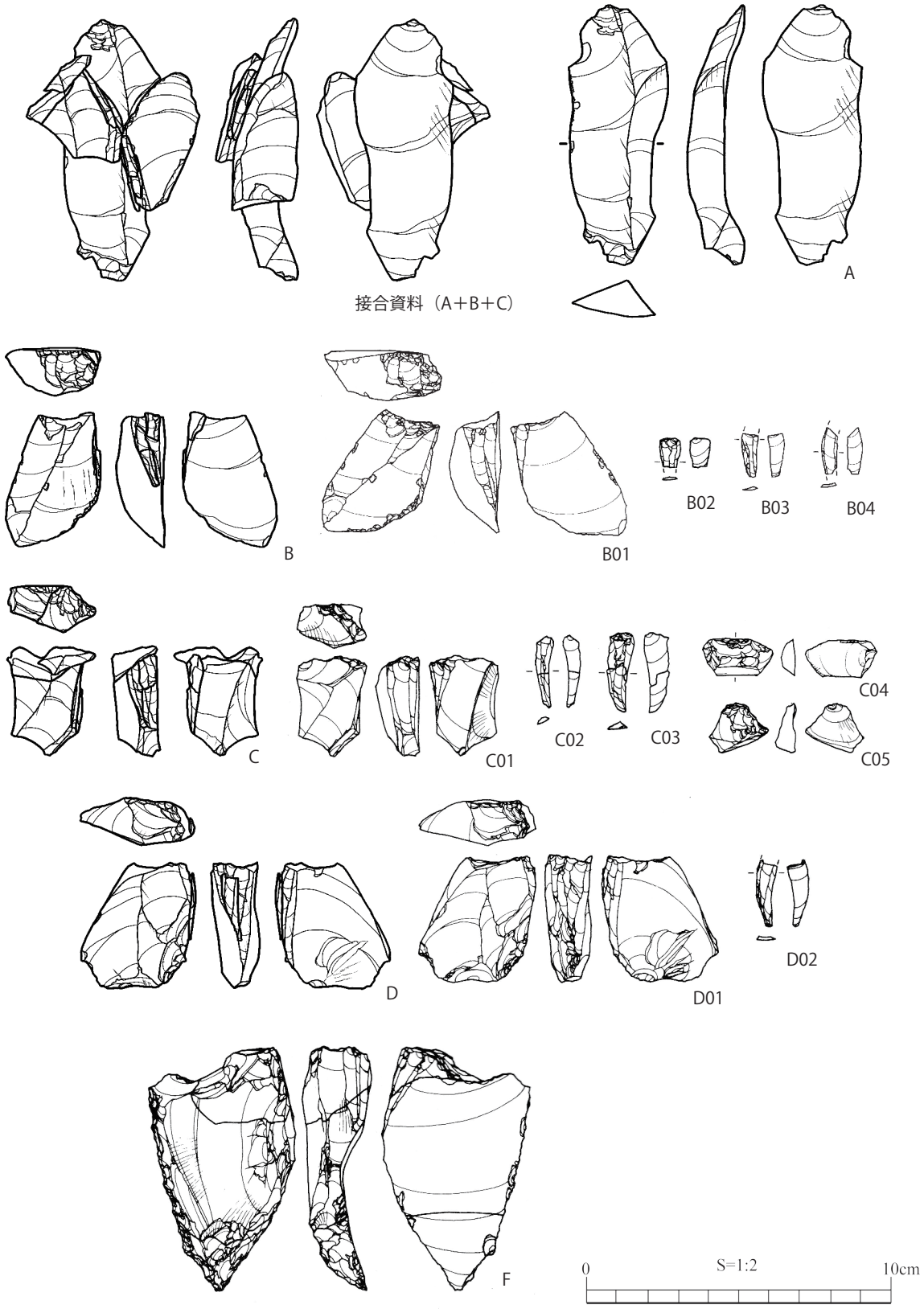


図５　泉町A遺跡の細石刃核と接合資料（B01～04，C01～05，D01・02，Fは北沢1992より転載）

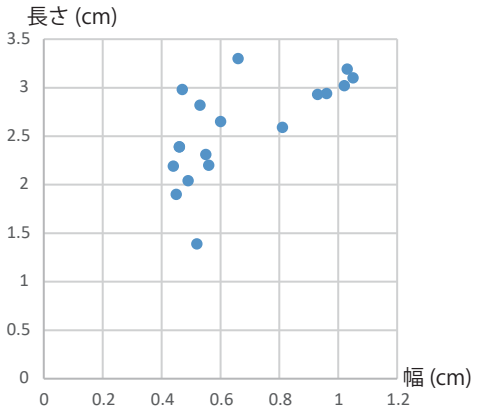


図６　完形細石刃の長さ・幅

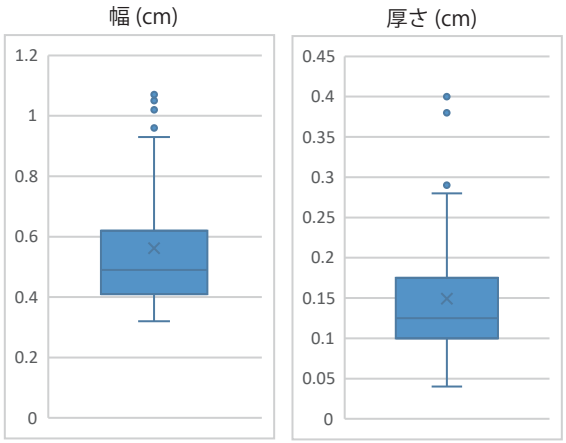


図７　細石刃の長さ・幅

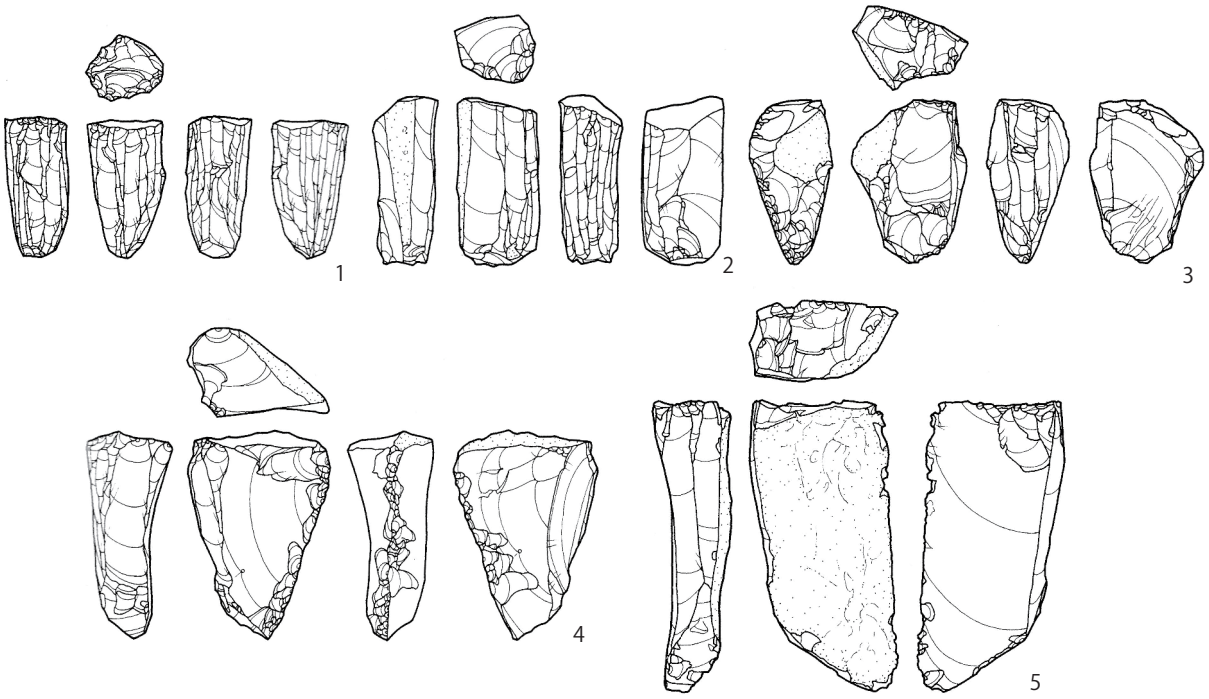
峠下型細石刃核にも素材の剥離方向に沿った作業面をもつ例があるということからその多様性の一つとして捉えた。

素材の種類や細石刃形態における広郷型との差異に基づいて，峠下型の変異とする理解が適当とは言い切れない。まず，素材に対する細石刃剥離作業面と打面の配置は，細石刃核型式の判断において軽視できない基準である。確かに峠下型には素材剥離方向に沿って作業面配置される例もあるが，極めて稀である。それだけでなく，頻繁な側方調整や作業面側からの細かな打面縁調整も峠下型ではあまりみられない。峠下型では打面が右側面方向に傾く例が多いが，細石刃剥離はそのまま進行している。それに対し，泉町 A の細石刃核では，側方調整と細石刃剥離直前の打面縁調整によって傾きが修正されている。また，打面と細石刃剥離作業面の角度が 80 ～ 90° で，かつその変化が小さいことも，峠下型および広郷型との違いとなる。

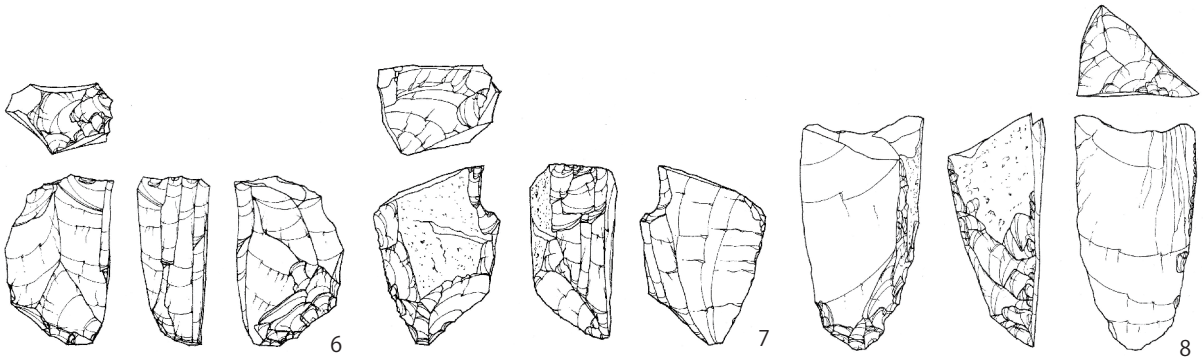
細石刃核の変異が生じる要因として，山原と山田は，石材環境を挙げている。山原は，遺跡から最も近い黒曜石の採取場所が 20 数 Km 離れた音更川と十勝川との合流付近であり，石器石材の供給が容易に行えず，これに対応した技術運用として泉町 A の変異が生じたと説く。山田は，広郷型細石刃核と特定石材産地との結びつきおよび地域的偏在に注意し，十勝地域や石狩低地帯で典型的な広郷型細石刃核がまとまった数量で発見される可能性は低いと述べた。しかし，その後，石狩低地帯では千歳市アンカリトー 7 遺跡（愛場・末光 2010），十勝地域では上士幌町萩ヶ丘 7 遺跡（北沢・乙幡 2022）で典型的な広郷型細石刃核を含む資料がまとまった数で出土している。最近，山形県の角二山遺跡においても広郷型細石刃核および剥離された細石刃が出土している（鹿又 2023）。分布論的に道東北の優良な黒曜石産地付近に広郷型細石刃核が多いという事実は揺るがないが，典型的な広郷型細石刃核は白滝や置戸等の優良な黒曜石産地から離れた地域においても存在することは考慮する必要がある。時間的同時性と分布論的差異を示すことが出来ないのであれば，典型例との共伴によって変異であることを証明するしかない。しかし，泉町 A では北海道の楔形細石刃核に伴うことが多い斜刃・横刃形彫器もなければ，札滑・峠下型細石刃石器群に含まれる篦状石器，広郷型細石刃石器群に含まれる剥片製で小形・薄手の斧形石器といった代表的石器もない。細石刃核，その他トゥール組成の両方において典型例が含まれていないため，峠下型または広郷型の変異という解釈を補強することは難しい。

これらと違う意見としては，直江（2007）による紅葉山型細石刃核との技術形態的類似性の指摘がある。直江は，遠軽町奥白滝 1 遺跡（直江・鈴木 2007）において，剥片素材の母岩・個体で観察された母型作成技術や打面作出法に着目し，一部の峠下型細石刃核および広郷型細石刃核との類似について述べ，具体的な例として泉町 A の細石刃核を挙げている。さらに続けて，新潟県荒川台遺跡（阿部 1993）で設定された荒川台技法の母型作成技術との類似にも注目した。それ以前に，阿部（1998）は，荒川台技法に近似する資料として，泉町 A と長野県仲町遺跡の細石刃核に言及しており，直江の意見もこれを踏まえたものと推測される。その後も阿部は，佐藤（2011）の稜柱系細石刃石器群形成仮説を批判するなかで，改めて荒川台と泉町 A の細石刃核の類似に触れている（阿部 2013）。

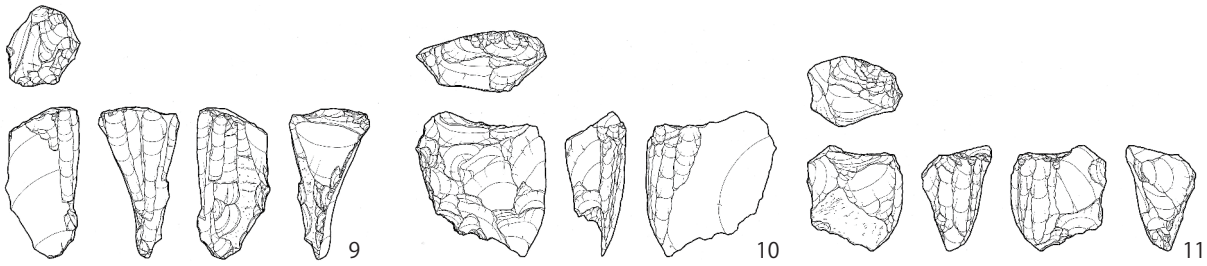
紅葉山型細石刃核は，礫や大形で厚みのある剥片から石刃剥離が進行した後に細石刃剥離に移行し，細石刃剥離が進行したものは円錐形・砲弾形を呈するという例（例えば図 8：1）が典型的である。山



北海道　奥白滝 1 遺跡



新潟県　荒川台遺跡



青森県　五川目 (6) 遺跡

0　S=1:2　10cm

図８　東北日本の稜柱形細石刃核（阿部2002，岩田・最上2011，直江・鈴木2007より転載）

田（2006）が言うように，軽微な稜調整は施されるが，石核側面の調整痕跡に乏しく，打面再生・調整を繰り返しながら，側面の特定の範囲ごとに集中的な細石刃剥離を行う傾向にある。奥白滝 1 では，細石刃剥離作業面が狭い範囲に限定される例もある（図 8：2 ～ 5）。石刃・縦長剥片を素材として即座に細石刃剥離に移行する例はないが，一部に母型作出や細石刃剥離作業面の展開など類似がみられる。また，階段状の剥離や細かな打面縁調整によって作業面と打面の角度が 80 ～ 90° に維持される点も共通する。泉町 A の例が紅葉山型細石刃核のバリエーションの一つとして捉えられるならば，峠下型・広郷型細石刃核に伴う代表的トゥールの不在を考慮する必要がなくなる。

阿部（1993）が提唱した荒川台技法では，細石刃核の主な素材は剥片である。素材生産の方法は，①縦長の分厚い剥片を一定方向から取る手法，②縦長の分厚い剥片を多方向から剥離する手法，③幅のある分厚い剥片を多方向から剥離する手法がある。細石刃核母型や細石刃核の形態には変化があるものの，母型Ⅰ類（図 8:8）・石核Ⅰ a 類（図 8:6，7）が数量において中心を占めると指摘される。母型Ⅰ類・石核Ⅰ a 類は平面形が U 字形，横断面は半円形・三角形・台形，縦断面がノミ状，三角形状のものを指す。同様な例は青森県五川目 (6) 遺跡（岩田・最上 2011）でも出土している。五川目 (6) では，利用する原石サイズの制限もあり，底面や下設打面のある角柱形の細石刃核も少なくないが，阿部の Ia 類に相当する背縁・底縁加工のある小口面型の細石刃核も多く含まれる。中部・関東以西の稜柱系細石刃群に比べると，東北では縦長剥片を生産する傾向にあり，そうしたなかで厚手縦長剥片が細石刃核素材としても利用される（夏木 2020）。

紅葉山型細石刃核と本州の稜柱形細石刃核との間の地理的空白は徐々に埋まってきており，年代的にも約 19,000 年前頃に併行する可能性が高い。こうした状況を受けて，直江（2007）が述べた紅葉山型と荒川台技法による細石刃核の類似性についても考慮する必要がでてきている。北海道と東北における稜柱形細石刃核の素材や母型作出法，打面作出・調整，細石刃剥離面の展開の多様性を考慮すると，その中で泉町 A 遺跡のような変異が生じた可能性もあり得る。それだけでなく，峠下型と広郷型の類似性（鶴丸 1979）や折衷的様相をもつ細石刃核の存在（山原 1997）についても排除すべきではないだろう。広郷型細石刃核は，従来の年代観よりも大きくさかのぼる年代が指摘される（鈴木 2016；直江 2014）。近年の萩ヶ丘 7（北沢・乙幡 2022）の例を加え，特に 21,000 ～ 20,000 年頃の年代に集中する状況にあり，紅葉山型細石刃核と年代的に近接してきている。角二山遺跡において広郷型細石刃核が出土したことで，本州東北部にまで視野を広げてこの変化の流れを捉える必要が出てきている。したがって，泉町 A の細石刃核型式の解釈めぐっては，峠下型や広郷型だけでなく，紅葉山型および荒川台技法も考慮すべきことを強調しておきたい。

おわりに

本研究では泉町 A 遺跡出土の細石刃石器群について再検討し，細石刃核の技術形態の観察に基づいて，細石刃核素材から細石刃剥離にいたる工程の特徴を示した。そのうえで，当該細石刃核に関する先行研究の見解を整理するとともに，その合理性や問題点を示した。本稿では，新たに紅葉山型細石刃核や荒川台技法との共通点やその変異としての可能性について考察した。本州東北部および北海道における細石刃石器群の変遷には未解明な部分も多く，信頼性の高い年代を決めていくことが課題となる。今回は，泉町 A 遺跡における石器の機能・用途や石器石材利用について触れることができなかった。稿を改めて論じたい。

謝辞

次の方々，諸機関に感謝申し上げます（敬称略）。北沢　実，出穂雅実，岩瀬彬，森　久大，山原敏朗，帯広市教育委員会，帯広市百年記念館。

本研究は，JSPS 22K13238「遺跡形成過程分析による北海道の更新世末人類社会の解明」（代表者：夏木大吾）の研究として行った。

引用文献

愛場和人・末光正卓 (編) 2010『千歳市アンカリトー 7 遺跡・アンカリトー 9 遺跡』北埋調報 268，北海道埋蔵文化財センター

阿部朝衛 1993「細石刃技法の把握」『細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ』，pp.161-170

阿部朝衛 1998「新潟県荒川台遺跡第六次調査略報」『帝京史学』13，pp.179-194

阿部朝衛 (編) 2002『荒川台遺跡－ 1989 年度調査－』帝京大学文学部史学科

阿部朝衛 2013「新潟県荒川台遺跡第一三次調査略報」『帝京史学』28，pp.1-78

岩田安之・最上法聖 (編) 2011『五川目 (6) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 502，青森県教育委員会

上野秀一・加藤稔 1973「東北地方の細石刃技術と

その北海道との関連について」『北海道考古学』9，pp.25-49
加藤晋平 1965「北海道の石刃－とくに細石刃技術について」『歴史教育』13(3)，pp.15-21
鹿又喜隆 2023「山形県大石田町角二山遺跡 2017 年から 2020 年発掘調査の要点」『北村山地域史研究会』22，pp.1-9
北沢実 (編) 1992『帯広・泉町 A 遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告 10，帯広市教育委員会
北沢実・乙幡康之 (編) 2022『上士幌町・萩ヶ丘 7 遺跡』上士幌町埋蔵文化財調査報告 4，上士幌町教育委員会
木村英明 1991「北日本の細石刃技術」『十勝考古学とともに』pp.1-8
佐藤宏之 2011「荒川台型細石刃石器群の形成と展開」『考古学研究』58(3)，pp.51-61
杉原荘介 1965「会報」『考古学集刊』3(2)
鈴木宏行 2016「古北海道半島における MIS2・3 期の白滝産黒曜石の採取とその変遷」『旧石器研究』12，pp.23-46
筑波大学遠間資料研究グループ (編) 1990『湧別川』，遠軽町教育委員会
鶴丸俊明 1979「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』47，pp.23-50
鶴丸俊明 1985「「広郷型細石刃核」論－その形質と意味－」『論集日本原始』吉川弘文館，pp.113-138
寺崎康史 2006「北海道の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』同成社，pp.275-314
直江康雄 2007「まとめ」『白滝遺跡群Ⅶ』北埋調報 236，北海道埋蔵文化財センター，pp.301-354
直江康雄 2014「北海道における旧石器時代から縄文時代草創期に相当する石器群の年代と編年」『旧石器研究』10，pp.23-40
直江康雄・鈴木宏行 (編) 2007『白滝遺跡群Ⅶ』北埋調報 236，北海道埋蔵文化財センター
夏木大吾 2020「東北日本の稜柱系細石刃石器群」『福岡大学考古学論集』3，pp.3-16
山田　哲 2006『北海道における細石刃石器群の研究』六一書房
山原敏朗 1997「帯広市泉町 A 遺跡の細石刃核について－細石刃剥離技術の変容の一例」『北海道旧石器文化研究』2，pp.25-30
吉崎昌一 1961「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族学研究』26(1)，pp.13-23